

日の経営であること、2つには、かつて経験したことのない、不況下の物価高、すなわち、スタグフレーションが、世界を包んで荒れまわっているが、これを沈静する効果的対策を見出しかねており、しかも80年代を通じていよいよその猛威をふるうのではないかと懸念されていること、さらには、中進国の低労賃を武器とする各種工業製品の追い上げと自動車およびエレクトロニクス産業に代表的に見られる、輸出先の先進国の同種業界との摩擦の激化等が部外者にも強く印象づけられているものであり、農業界の苦悩と性質を異にする面もありますが、いずれ劣らぬ基本的なものであり、危機意識を高めるわけも十分納得できる態のものであります。

このようにそれぞれの業界が苦境に立つと、その業界間の関係が深ければ深いほど、その間に不協和音が発生し勝ちなものでしょう。1 昨年の日米経済交渉を契機として表面化した、農業界と経済界との軋みは、労働界も加わり、今だに十分なコンセンサスが得られておらず、今後とも事あるごとにむし返され、下手をすると、歪みの幅を拡げ、対外交渉上も不利を招き、国益を損ずることが憂慮されます。

経済界を代表する方々の意見を紙上等で拝見する機会もありますが、農業批判のうち納得も

し、参考になる点も少なくありませんが、一方、実態認識を欠いた、身勝手ないい分もあります。恐らく農業界の代表者の経済界批判にも、同様な誤りを犯している点もあるのではないかと推測されます。

今日重要なことは、お互いに相手業界の苦境の実態、その因ってくる源を十分理解する努力を惜んではならないことではないだろうかと考えます。これは実際にはきわめてむずかしいことでしょうが、少なくとも謙虚に相手業界のいい分に耳を傾ける寛容さを持たねば、明るい展開は望めないものと考えます。

協会は、除草剤・植物生育調節剤生産を行なう企業と農業の接点に立つものでありますが、業務が、それら諸剤の利用開発普及という分野に限られており、むしろ両業界の共通利益追求の場ともいべき性格のものでありますから、協会が両者軋みの間に挟まれ、去就に迷うということは考えられませんが、両業界の今日的苦悩を十分理解してかからないことには、その役割をよく果し得ないものと考えます。その点自覚して職務に取り組んで参りたいと考えます。両業界としても、お互いに理解を深め合い、共其の発展を遂げられるよう願うものであります。

会 長 退 任 挨拶

財団法人 日本植物調節剤研究協会常任顧問 戸蒔義次

このたび私は植調会長を退任することになりました。協会設立の際は会長代行として苦労しましたが、2代会長をお受けした昭和48年の頃

は創業の苦難を切り抜けて逞しい成長の途上にあり、私は勞せずして発展の波に乗っておればよかったのです。勞せずしてというのは私1人

のことで、吉沢専務ほか職員の苦心と努力はよく存じております。

会長就任1年後の49年には鴻巣から移転の研究所が牛久町に新装成って、その竣工披露を協会創立10周年の記念式典と共に挙行することができました。この移転拡充は河田会長時代に計画され、吉沢・田口・天辰さん等の並々ならぬ苦勞を経て実現したもので、特に天辰さんの用地取得のための戸別訪問交渉には深く感銘しました。その後も研究施設、試験用地、環境整備等の充実に努め、53年に多年生雑草試験用の畑1haを新造成、55年に実験室を増設して文字通り旧倍となりました。

研究所の施設充実に共に事務能率の向上も重要ですので、数年前から自前の事務所で、十分なスペースをとって仕事ができるよう植調会館の建設を志していましたが、これも吉沢・田口さん等の努力で二転三転の後、55年8月に完成、12月に植物調節剤利用開発普及30周年の記念式と共に盛大におひろめすることができました。

この間、雑草防除技術についても次々に問題が起こりましたが、吉沢・鈴木・小沢さん等が中心になって適切に対処しました。すなわち、前から問題の環境汚染はこの頃になって対策が具体化し、薬剤の残留毒性について分析の実施や委員会による検討がなされるようになったが、

除草剤の累積的影響を心配して昭和49年に除草剤永年使用による土壌・作物・微生物の反応の調査研究を主要除草剤について開始しました。続いて50年に少量散布、52年に体系是正、非農耕地の多年生雑草の除草剤、53年には生薬使用の増加に対応して強還元田での安全使用法、転換畑用特に大豆麦類の除草剤、水田除草剤の水産動植物に対する安全使用、55年に畑地における細粒除草剤の利用等に関する諸試験を実施しており、何れもメーカーや農家、広く社会の要請に応える先取的発想と思っています。

次に除草剤の普及について特筆すべきは、ブラジル植調の設立であります。これも吉沢専務の発想で、今後の需要拡大は海外進出を計るべしと考え、ブラジルを主とする南米諸国を好適地と判断したからで、竹下さん等の奮斗で55年1月に設立をみました。国内では既設の東北・北海道支部に続き48年北陸、50年九州、52年近畿中国四国支部が発足しました。このように植調は幹部の発想と職員の協力により、外部の信頼を得て形も内容も向上して参っています。こんな順境のうちに退任できるのを真に倖わせに思います。これからも誠実一途に処して、植調協会のさらに発展することを念願して、退任の挨拶と致します。

植物調節剤利用開発普及 三十周年記念式典開催す

植物調節剤利用開発普及三十周年記念式典実行委員会

1. ま え が き

除草剤が、水稻作において、わが国ではじめ

て試験されたのは、2,4-Dの利用が本格的に試験を始めた23年からである。24年春には試験成